西部日本における原因・理由表現の分布と歴史

――『方言文法全国地図』の解釈――

彦坂佳宣

はじめに

『方言文法全国地図』（国立国語研究所編、以下 GAJ）は、各地の方言文法を地図に表したもので、現在4巻まで公刊されている。これによって、各地方言の文法事象が鳥瞰できるようになってきた。地域の特色、地域間の関係、全国方言の区画などの研究に有用なものである。

地域差を見極める視点は、やがてその歴史を問うことなる。今日の模様は、絶え間のない近隣方言同士の接触、地方と中央の方言の直接・間接の交渉の結果である。長い歴史としては、京都語を中心とする歴史（国語史）が各地に波及し、地域的な変容や独自の展開を交えたものが地理的に投影されていることになる。まとめられつつある全国規模の GAJ を資料としてこの点をさぐってみたい。

本稿では、原因や理由の言い方（以下、理由と総称）についての地理学的解釈を試みる。接続条件法の中の、いわゆる必然確定の言い方の歴史をたどることになる。既にノート風に記したことはあるが[1]（以下、前稿）、十分でなかった。それを補う意味で、今回は西部日本の模様について考察する。東部日本の考察と本稿を含めた総合は、続稿を予定している。

一、GAJから歴史を推定する

まず、今日の分布から言語地理学的に各形式間の相対的な歴史を推定してみる。

分布の様相

GAJ の該当図のうち33図「雨が降っているから～」を、簡略に示すと図1のようである（詳細は原図を参照されたい）。類似の表現図は、35図「だから（言ったじゃないか）」37図「子供なので～」もあるが、関東地方中央でカラとノデの分布が違う点を除けば大きな差はない。この違いは続稿で取り上げることとして、

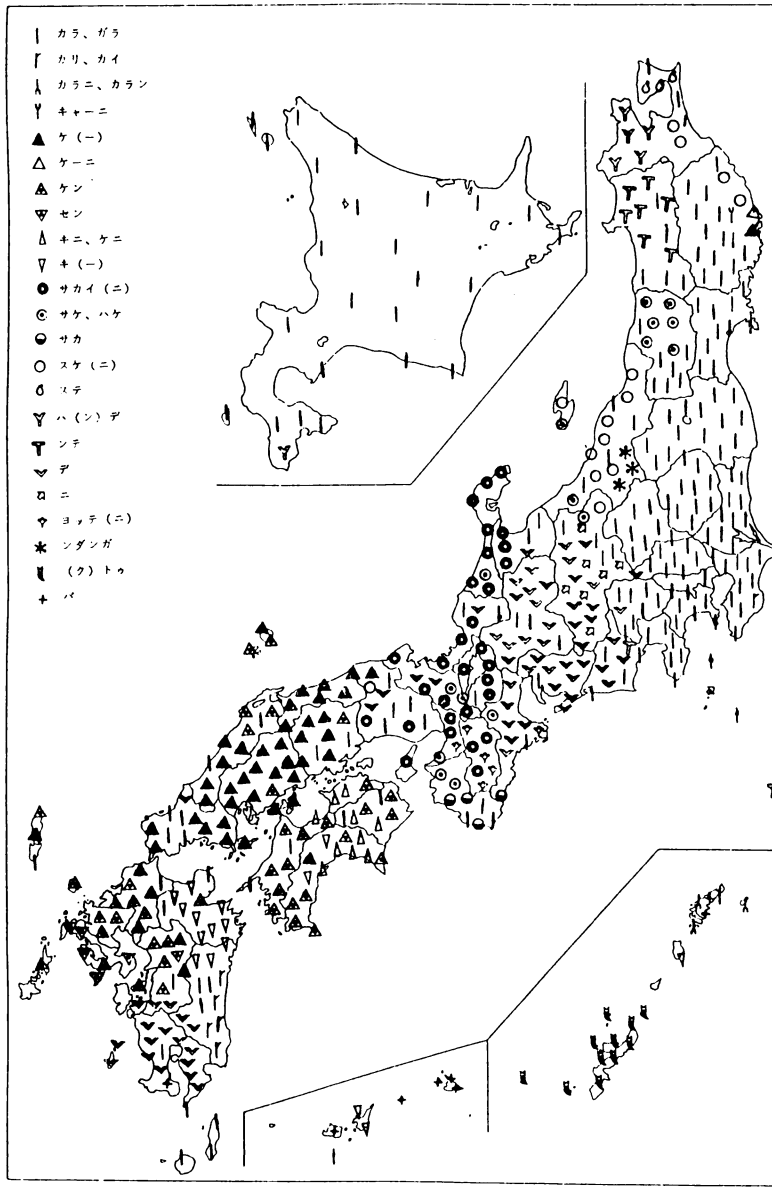

図1　雨が降っているから

今は33図の文脈のものを直接の分析対象とする。

まず、カラは東日本に広いのに対し、西日本ではやや散在し、他の形式が中心である。この地域差は東西方言の形成の仕方の違いによるものであろう。

近畿ではサカイ類が広く、北陸から山形県へかけサカイ・スケ・ハケ等の形で連続し、飛んで太平洋側の青森県・岩手県北部に続く。近畿から日本海の交流を通して伝播したものと考えられる。

近畿南部にはヨッテ類があり、秋田県のンテ類もこの変化と考えられている。青森県津軽地方にはハデ類があり、これはかつて中世京都近辺にあったホド（ニ）類と関連するとされる。[2]

中部地方ではデが広く、近畿周辺にも広域に点在し、近畿からの放射が考えられる。山口県や鹿児島県にもあり、その関連が問われる。静岡県・長野県のニは孤立していて、これだけでは歴史を知りがたい。

近畿を除く西日本には広くケニ・ケン・キニ・キン等（以下ケン類）が広く展開する。これには諸説あって、カラ・カラニ由来説、サカイ説、ケニ（故ニ）説などがある。[3]

九州では、東部にカラ類があり、大分県のキイはカラ類に後で割り込んだものであろう。西北部にはセンもある。

琉球の宮古・八重山の〜リャーは〈已然形＋バ〉で、類例は岩手・山梨・広島の各県山間部にある。沖縄諸島のクトゥ（コト）・ムン（モノ）、五島列島のモンノは形式体言が条件法を構成したものであろう。なお、これらは図1では省かれた所がある。

歴史的解釈

言語地理学では、偶然の一致や規則的変化の結果を除けば、中央（国語史の根幹をになった奈良・京都の方言、近世以降は江戸・東京、狭くは各地の中心も）から遠いものほど古く、近いものは新しいという周圏論的な考え、また近隣同士の語形は歴史的に関連が深い、孤立しているものは独自の発達も考えられるなどの原則がある。これらによると、歴史のあらましは、次のように推定されよう。

まず、古くは沖縄や本州山間部に点在する〈已然形＋バ〉が理由を表す形式であった。その後、各地でカラ・デその他が生じて〈已然形＋バ〉はほとんど淘汰された。ニも恐らくカラとデの間の時期のもので、各地にあったが消滅したのであろう。

デは近畿から同心円状に散在していることからも、〈已然形＋バ〉・カラ等の後に近畿から各地に広がったものであろう。その後、近畿ではサカイ類が生じ各地に伝播した。狭い分布地域のヨッテ類・東北日本海側のホド・ヨッテ類は、後述する国語史の知見を加えれば、サカイ類が隆盛する前に近畿で盛んであり、カラ・デとサカイ類との中間期のものと考えられる。

中国地方以西のケン類の素性はよく分からない。[3] カラ類とすれば、近畿を挟んで東西に均等な周圏分布が現れてバランスがよいが、疑問も多い。カラも東西のその関係などが問題である。

以上から、西部日本での歴史を考えるうえで、次のような点が特に問題になり、史的解釈はそれによって違ってくる。

・近畿からやや離れた地域に広くあるケン類をどう考えるか。
・東日本のカラと西日本に散在するカラは同じものか。
・中部・近畿のデと九州南部のデの関係はどうか。
・中部の一部に孤立したニをどう見るか。

また、右の諸点の考案には、単に史的な由来を問うだけでなく、各地域で消えてしまったものを含めた形式間の重層的な変化を推測する形で進めることが肝要であろう。

二、過去の方言文献の検討

分布解釈の他に、過去の方言文献から直接その歴史を考えていく方法がある。従来多くの成果がある国語史研究は、文献による中央方言の研究である。地方語の場合、文献自体の少なさが障害となるが、いくらか手がかりはあると思う。

ここでは、まず中央語として日本語史の軸となった、京都方言を中心とする国語史での理由の言い方のあらましを整理し、次に地方的な文献を検討する。

近畿中央部の模様

古代から中世にかけての国語史研究は山口堯二・小林千草・小林賢次など各氏のものが参考になる[4]。

それによれば、通時的にはおよそ次のように捉えられよう。上代から中古にかけて、順接を示す〈已然形＋バ〉のうち必然確定の用法があり、また格助詞から転じたヲ・ニもあった。中古末から中世には形式体言アイダ・ホド・ママ・カラ等に助詞ニ・デを付加した分析的形式がそれぞれ特色ある理由表現を担当するようになる。また、ニ・ヲなどは順接・逆接をふくむ広い条件法であり、他のものはほぼ順接の条件法であるが、全体に文脈に依存して理由の表現がなされる傾向から専一に理由の表現を表すようになることも指摘されている。形式動詞ヨッテもこれに参加する。やがてサカイ類もこれに加わる。

中世から近世前期にかけては、その表現性の分担を変化させながら、ホドニ・ヨッテ類から段々サカイ類が増加しだす。この点は小林千草氏の研究にくわしい[5]。

以上の既存研究の他に、ここでは室町末のキリシタンによる直接的な記述の一例として、ロドリゲス『日本大文典』（土井忠生訳による）も参照しておきたい。この時期は各地方言の諸形式とかなり関係深いものが現れてくるのである。

前節の問題点にかかわるものを中心に整理すると、次のようである。

〜デゴザレバ・ニ・トコロデ、ヨッテ・ホド等が理由の表現に使用される形式としてあり（19・455頁等）、カラは格助詞の用法が多いが、その中に「往々ヲの代りにヨリ・カラを用ゐるが、余り正しい言ひ方ではない」として「橋から渡った／町から行つた／船から参つた」等があり（405頁他）、「（主格が）受動動詞の動作者を示す奪格のやうなもの」として「お二人から申さるるは」

（502頁）、「正に何々だから、たとひ何々だとしたら」の意で「ご存じないからさやうに仰せらるる」「参るからは何なりとも」をあげる（553頁）。「正に何々だから」は理由の接続助詞であるが、しかしこの用法は十分発達していない様である。

サカイ類は、直説法と接続法の両方があげられ、接続法では「読まうとはしないから」の意味で接続助詞としての「読むまいさかひに」等の例がある。また、「読むまいに」も並記され、ニも理由の接続助詞としている。

ケン類にかかわる記述はまず見られない。ただ、『日葡辞書』（邦訳による）に「ケ（故）」は体言として出ている。

こうした中央語史の時間軸における様相が、やがて各地の方言に強く影響したものと考えられる。

近世期各地の方言文献から

従来の地理学的研究は、研究の深化している国語史（中央語史）の時間軸と今日的な分布の空間軸との十文字的な対比に限られたうらみがある。

本稿では、出来るだけ各地の方言文献も加えて、時間・空間とも複数軸による解釈の手だてを取りたい。現実には各地の文献は点在するのみ、それも近世後期のものが中心であるが、いくらかは過去の分布軸を重ねた解釈が可能である。

（1）伊勢地方

伊勢冠付（かぶつけ）雑俳　この地域には近世中・後期の資料として、『未刊雑俳資料』[6]に宝暦頃から文化期にかけて20点ほどの伊勢冠付雑俳がある。宇治山田や松坂などの近隣同好者が参集して、選句を経て多くは一枚刷の形で配布されたものという。その表現は、非常に卑近で方言資料となる。

理由表現には、まず、デが最も多く、20例ほどの例があり、GAJの模様とよく共通する。

○ひよんな道　来たで百姓に呵られた　享保一二・一三『二重袋』29・11・40

○義経蝦夷へ渡り玉ひ　飛バしやるで天狗ジヤトいふ　文化元年か『伊勢冠付集』25・14・45

早いのは享保期の例で、少なくとも近世前期末にはデがあったことになる。順接で理由の表現を表わし、文中にあって、帰結句をとる形が多い。

次にニもあり、これは順接・逆接の両方に使われる。まず、順接で理由の意味の例が5、6例見える。

○いやがられる人　広いに来イとまねく也　年代不明『山田冠付』41・11・1

○千秋万歳楽　だまりまするに見さつシヤレ　文化三年『山田冠勝句寄』41・4・34

次に、格助詞とも接続助詞ともとれて、意味も文脈に依存する度合いの強い例もある。次の例は「～時に」なのか「～ので」なのか曖昧である。

○嘸ほしがり　すすめられるに辞儀を仕ル　文化以前『山田冠勝句』41・9・25

逆接の接続助詞の場合もあり、全体としてはこれが多い。

○色盛りのおなき　ヱゝ男じやにとび出たり　文化八年『山田松坂冠勝句集』41・5・39

○予レを旦那にせいで　疱瘡が有ツてもだんないに　文化以前『山田冠勝句』41・9・20（だんない＝構わない）

ニは格助詞から接続助詞へと変化したが、右の「すすめられるに」の例のように連続する面がある。文脈に依存して各種の意味を派生し、理由の意味はこうしたものが状況的に現われた傾向が強い。デも文脈依存度は高いが、条件法としてはニより用法の幅が狭く、理由の意味は相対的にはっきりしている。文中で条件法となるデに対し、ニは文末に位置して終助詞的な用法を兼ねるものが多い。

歴史的には、デはニテから生まれたことと伊勢雑俳での用法からも、ニが古くデが後と考えられる。この変化はニの文脈依存度の高さが嫌われ、デの相対的な理由表現の明示性が評価されたものと思われる。GAJ では伊勢にニは無いが、かつてはこの地域でも使用されていたことが判明する。

他に5例ほど（ニ）ヨッテが出る。

○ヲダラ九市　すすめたよつて見よといふ　文化二年『山田冠勝句』41・3・1

○天下（あたま）ゲぬによつて憎まれる　文化一〇年『山田冠勝句集』41・7・26

ヨッテは国語史では中世中頃以降に盛んとなる。おそらくこの頃に近畿中央からいくらか伝播があったのであろう。ニ・デに対し文体上の違いが予想されるが、雑俳で見る限りは、特にその手がかりはない。しかし、例の少なさや出自の地域性からもヨッテの中央色は否めず、文語的ないし共通語的な価値を帯びたものと考えられる。

最後に伊勢のカラを見ておきたい。

起点を表す格助詞カラの他に、次のような例が注意される。

○五条の橋の千人切　銭がないからおこつたり　文化初年以前『山田松坂冠附全』41・10・41

○だまされて　どんなからじやとしかられる　文化元年以後か『伊勢冠付集』25・14・10

○うたがひ深い女房　大事に思ふからといふ　年代未詳『山田冠句』41・11・7

初例は抽象的な起点として格助詞の扱いが出来ようが、次の「鈍なから」は起因の意味が強く、最後の例は文末にあって理由の接続助詞に近い。格助詞から、文脈的に理由を表す接続助詞へと転じていく可能性があったことが考えられる。

（2）美濃地方

『美濃能郷猿楽狂言詞章』　この地方についていくらか手がかりになるものが『美濃能郷猿楽狂言詞章』である。これは、慶長三年奥書の「慶長三年狂言本」と「能郷猿楽狂言詞章」とがある。[7]

このうち慶長本は口語的な理由表現がない。一方、「能郷猿楽狂言詞章」はくだけた文体で、それだけに長い伝承の過程で方言

口語の混入が期待される。

しかし、基本は次のようにやはりホドニ・ホドが多用されていて中世的な様相が強く、伝承の元となった詞章を引き継ぐことが分かる。ホドニの例をあげておく。

○そちが帰りが遅いので、旦那様が迎えに行ってこいとおおされました程に、迎えに来たのじやわい　烏帽子折り（555頁）

ホドの例は省略したが、ホドニのニが脱落したものであろう。また、引用例のようにノデも複数例あるが、国語史でのその成立・一般化は近世中期以降と言われていて、やはり伝承過程での改変が行なわれたと考えられる。

このほか、体言につく～サニもある。

○シツナイ茶も楽く楽くとのみたさに、其れでこうもうしますのじやに、其れがお気にさわるか　鐘引き（559頁）

さて、注意されるのは、デが次のように4例みられることである。

○（恵比須）己が先に入ったで婿じやわい。（毘沙門）己が立札をひいて入ったで婿じやわい。（有徳人）ノー両人様先に入ったで婿じやの。高札をひいて参ったで婿じやのと申しては果てますまい。　恵比須毘沙門　（567頁）

似た表現に重なって出ているが、『虎明本』等は全く違った文体で、これを考えると、時期は確定できないものの美濃方言が混入したものに違いない。このデは、GAJ の様相とも通い合う。

（3）中国地方

この地方は、ケン類の問題がやっかいである。過去の方言文献は乏しいが、中世以降中国地方で伝承されて来た「田植歌」（ただし近世期写本）と播州の講義録『だいがく』を考えてみる。

田植歌　友久武文編『稿本田植草紙』[8]の解説によれば近世期をさかのぼるものがないとされ、本文の異同も大きいが、ひとまずこれで理由の言い方の周辺を整理すると、次のような状況である。

まず、山内洋一郎氏の指摘した[9]ケニが1例ある。

○いねがよいけにたわらをあめやせんとく　（114頁）

「せんとく」の解は諸説あるが、ケニが理由の表現であることは動かない。校異を見ても同文が2つあり、まず確例としてよいようである。

ニは理由の意味のものを数例拾うことができる。

○お茶お参れや鞠蹴て喉の乾くに（242頁）

○婿どののおりやるにでい（出居）の塵をとれやれ（300頁）

逆接のニもわずかにある。

○寝はだ惜しいによあ（夜明カ）の烏はや鳴く（21頁）

ホドニも2例ほどある。

○えいや掛けの声するほどにはらり出てみたれば大黒と夷の俵積む声やれ　（306頁）

カラは、格助詞カラは見えるが、次のような接続助詞的なカラは孤例と思う。明確に理由の意味とすることはひかえるべきか。

○夕夜の稀人はおでい（お出居）からかでいからか

お出居からよ出居からよここに寝るからよ
忍ぶ殿子がこう来てここにこそ寝た（301頁）

〈已然形＋バ〉もあるが、既に偶然確定の意味である。

以上によれば、今日のケン類につながるケニが見られるほか、中世京都語で栄えたホドニもあり、またニも見える。一応理由を表すのに近いカラもある。

問題は「田植歌」の言語の時代性である。原初は中世以前であろうが、反映する方言の時代は近世前・中期と見るのが無難であろう。ケニの時期も確定し難い。[10]

反面、この資料は地方ならではの難解な表現が多く、方言性に立つ感じが強い。この点で、以上の模様はほぼ中国地方近辺の近世前・中期あたりの方言を反映する可能性が高いと思う。すると、今日この地方はケン類一色であるが、近世初・中期以前にはニ・ホドニ・ケニの類があり、カラもいくらか理由の表現に近い例があった様子が想定できる。

播州の講義録『だいがく』（寛政一一年1799）　この資料については、小林千草氏の整理[11]もすでにあるが、あらためて概観してみる。

まず、サカイ類がよく使用されている。

○ただ理をまだ極めぬことがあるさかいに、その知つたことに尽きぬことがあるは。（661頁）

○それじやさかいに、君子は我が家を教へて、内にいても国中に教へをなす。（663頁）

小林千草氏によれば、この時期の京阪のものはニヨッテ系がサカイ類より多いが、当資料のサカイ類はこの比率をかなり凌ぐという。その理由が問題となる。

カラは格助詞の他、次のように接続助詞に近いものがある。

○世間の人がその親しみ可愛がるからかたよる。そのしやしめに組むからかたよる。そのこはがりうやまふからかたよる。（663頁）

ただ、このカラも起点の意味がまだ残るとすべきか。また、次のように起点が疑似主格的に使用される例もある。これは先引のロドリゲス『日本大文典』に示されたカラの用法の一つと似ている。

○上から憎むものを用ひ、下となしつかふな。下から憎むものを用ひ上とし、奉公するな。……（665頁）

ヨッテ類もいくつかあるが、サカイ類には及ばない。

○～といふてあるによつて、孔子といふ聖人のおしやるには……（660頁）

ノデもある。

○我が言いつけること、先の好くところにちがうので、下がしたがはぬ　（664頁）

ホドニは時間的な用法のみで、理由の意味のものはない。〈已然形＋バ〉もすでに理由の言い方から遠ざかっている。

以上によればサカイ類、ヨッテ類・ノデなどが見られることになる。

問題は、この資料がどの程度播州の方言を反映するのかという

ことである。各地の講義録の言語は、方言の反映もあるが一般に改まった口語として近世共通語の性格を有するとされる。この資料は末尾に「（女童のために）しづけきことのはをもつて大意をしるし」とあるものの、近世中・後期の播州方言そのものの反映と見ることは今はひかえておきたい。ノデの使用にも、表現を対象化して述べる反省的な姿勢も感じられるのである。他の京阪期資料に勝ってサカイ類の多用されることも、この表現態度と関連するものではないか。

（4）四国地方

坂本龍馬の手紙　四国の方言文献は極めて少ない。いま坂本龍馬の手紙によってみる。[12]

今日に通じるキニ形が2例ほど次のように見られる。

○龍ハはやしぬるやらしれんきにすくにとりつく（姉への手紙、（割り注的箇所）（86頁）

○清二郎一人でさへ此頃のしゆつぼんハよほどはなぐすなれども、男であるきにまあをさまりハ付申べし　（姉らへの手紙）（307頁）

このほか、手紙文ではニヨリ・ユエ・アイダなども使用されているが、文章語的でもあり、土佐の生活方言ではないであろう。

次のように理由を表す接続助詞カラもある。

○近日私しが国におへる時、後藤庄次郎へも申候て、蒸気船より長崎へ御つれ申候。兼而後藤も老母と一子とがあるとやらニて、是も長崎へつれだすとて色々咄合仕候。私しハ妻一人ニて留守の時に実ニこまり候からいやでも乙様お近日私し直々に蒸気船より御とも致し候。　（姉への手紙）（305頁）

GAJ では四国にカラはきわめて少なく、近世期にもこのカラを土佐の方言とするかどうかは難しいところである。また、引用例に格助詞ヨリがあり、他にも使われているが、今日の共通語で「蒸気船でお供する」と手段のデで表現されるものである。このヨリは、口語的なカラで言うべきところを文章語のヨリに変えて表現しているものかと思う（この交替はロドリゲス『日本大文典』でも指摘あり）。するとこれも、格助詞カラが今日の共通語よりも幅の広い用法をしていたことを示す例ではなかろうか。

（5）九州地方

佐賀滑稽本『滑稽洒落一寸見た夢物語』[13]　多用される理由の言い方はケン類であり、ケヘニ・ケンが出ている。

○（町方老人）是も久しく何事もなかケヘニ知らぬハ道理なれども……　（255頁）

○主しやア多良岳からジャルケヘニ、れんこんナア食ふた事タア初てじやろふと……（259頁）

○ハア私ハ昨日からおこいチウもん振ふておるけん、今もふリイおるケヘニお助けンサアイテくいなれんかん　（264頁）

なお、理由の意味に使われる〈已然形＋バ〉もあるが、これは地の説明にわずかに出ていて、文語的な表現と思われる。ユエも

幾らかあり、会話にも現れるが、多少とも固い表現で方言口語とするにはどうか。

また、格助詞カラに、次のような今日と少し違う例もある。

○アアそふ物言ナ。佐嘉ンマツのもんどんから笑はるるテヘ（258頁）

これは、今日では「～に笑われる」と言うのが普通であろう。カラが理由の接続助詞として使用されている例はない。

薩摩漂流民ゴンザ資料　鹿児島には、一八世紀前半の薩摩方言を反映すると見られるゴンザ関連の資料がある。漂流してロシアに滞在し、ロシア語と日本語の対照辞書などの編纂にかかわった。そこに薩摩方言が期待されるのである。これには、村山七郎編著『漂流民の言語』に所収の「日本語会話入門」を主とするもの、同じく村山他編著『日本版　新スラヴ日本語辞典』に所収のものなどがある[12]。

これらの資料は、直訳的な対照が多く、また接続助詞が現れる複文相当の文脈も期待できない。ニ・ヲその他、接続助詞に転化する可能性のあるものもここには見いだせない。しかし、いくらか情報は得られる。

格助詞カラは、今日の共通語と違う用法がかなり出てくる。「日本語会話入門」には、次のような例が見いだせる。

○ドイ　オヤサユル　ファファカラ（それら【子ら】は母から養育される）（115頁）

○カタキカラ　ユジン　シェラル（敵を防ぐ）（119頁）

理由を表す接続助詞的なカラもある。

○ツカイェチカラ　イル　カネガ（こまったときはお金が必要である）（104頁）

○コシケチカラ　シャクイスル（こごえると、シャックリする）（115頁）

○ソゲン　カキソコノチカラ　カキナヲス　マタ　ゲイル　カク（もし書き損じたら、書き直すか又は縁に書きたす）（108頁）

○ネヂェナ　シチェカラ　シンドスル（寝ないで世話して辛苦する）（95頁）

ただ、用例によってはロシア語の直訳のために自然でない日本語訳になった可能性もある。

デは格助詞として、場所・道具・手段などを表すものが多いが、いくらか理由の表現に近いかと思われる例もある。

○フユナフタ　ヨカコト　ワガマイェ　トヤナラン　フユヂエ（何故なら怠け者は、怠けのため、よいことを自分に受け取らないだろうから）（106頁）

（彦坂注、ふゆ＝不精、スラブ日本語辞典）

しかし、ほとんど体言の直後についていて、格助詞の領域から大きく外れるものはまずない。

『日本版　新スラヴ日本語辞典』からも、あまり情報が得られない。しかし、カラの次のような例は、やはり今日と違って注意される。

○ワガマイェカラ　アツカル　我が前から預かる　（索引部568頁）

○ワガマイェカライル　自分で入る　（同）

なお、村山氏は次の例にケン類の可能性を認めている様子であるが、確実な例とすることはためらわれるので採らない。

○郊外の町　チットケンキョ　ちっとけん京[13]　（259頁）

以上によれば、ゴンザのものは、強い方言調があり、いくらかカラ・デに注意すべき用法はあるが、今日のGAJに直結する状況はほとんど見られない。その理由は、両資料とも辞書的な性格で、接続助詞が使用される環境に必要な複文構造の例が乏しいためと考えられる。

『大和口上言葉集[14]』　これは琉球での薩摩弁の参考のためと言い、薩摩弁を基調とする資料とのことである。難解で理解の行き届かない点もあるが概要は次のようである。

最も多いのはデである。

○上様の御仁政の妨にもなる事ぢやツで、是は被下切に被仰付申て……　（277頁）

○そのをなごがいふには、其不洗（フコサ＝袱紗）包は肝要なもんが入ちよれもうすで、どふか内は御見やつち給（タマン）てなど……（293頁）

ヨッテ類も多用されているが、口上の性格から、やや固い表現のものであろう。

カラは格助詞の用法は今日に外れる例はまずない。2例ほど見られる接続助詞は、薩摩か大和の奉行と沖縄の殿との対話の中にのみ現れて、かなり改まった物言いと思われる。

○気候の悪い所で取訳那覇は（？）而不順な所で御座り申すから是が御難儀で御座り申そふ。殊に暑気は大和より倍強ヨイ様子で御座り申すから、是にはよつぽど御込りの筈で御座り申す。（沖縄の殿から奉行へ）（285頁）

以上、理由の接続助詞にはデが多用され、ニヨッテ・ヨッテもあり、カラが混じる。恐らくデが薩摩で多用されるもの、ヨッテ類はかしこまりの表現と考えられる。カラは薩摩の方言の可能性は低く、しかし対外的な場面では使われたこともあろうか。

近世期のまとめ

以上、不十分ではあるが、理由の言い方について、近世を主とする地方的な文献によって西日本の模様を見た。概要としては図2の様になる。近世期にはすでに今日的な様相のほとんどが準備されていたことが知られる。

美濃・伊勢では今日と同じデがあり、中国・四国・九州の今日のケン類も散見される資料にほぼ同じものが現れてくる。鹿児島のデも同様である。

しかし、カラは各地で今日とちがう格助詞の用法があり、また理由の接続助詞に近い例も見られた。ホドニは現在北奥羽地方に狭まっているが、近世では中国地方に見られ、近畿から東西へ伝播したことが知られる。ニは伊勢の資料によれば今日より近畿寄りにもあり、「田植歌」資料からは中国地方の例が知られ、ロド

リゲス『日本大文典』の例を参考にすると、本州中央部から周辺にかけての広い分布が想定できる。

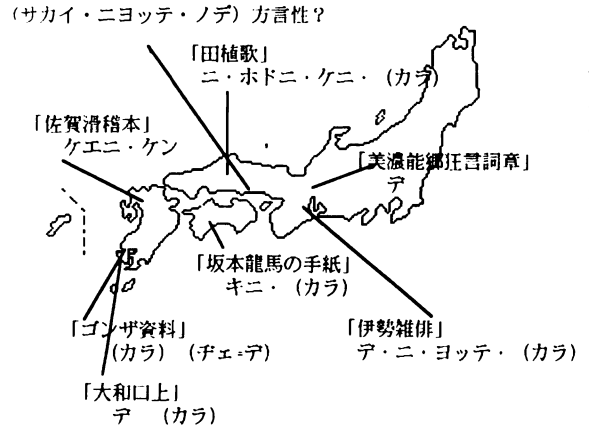

図2　近世期方言文献から

三、分布と方言文献との対比による総合

図1（GAJ）と近世資料の模様を点綴した図2の様相とは密度・正確さとも比較にならないが、両者を対比させ、また国語史の知見も参考にして、西部日本における理由の表現の歴史を推定してみよう。

デ・ニ　まず、考察範囲の東部、美濃・伊勢地方では、近世期からデが広く分布した。それ以前は、近世の伊勢のニが注意され、かつてはこの地域以東にニがあった、その後デが勢力を得てニを駆逐したのであろう。

これらの地方には近畿のホド・ヨッテ類はまずなく、伝播しなかったか、してもすぐに駆逐されたかしたことも推測される。[17] ひとまず逢坂・鈴鹿・不破の関に代表される東部地域への自然障壁のためと考えられる。すると、ニ・デは時期としては共に国語史でのホド・ヨッテ類に先立つ時期に東部に伝播していたことが推測され、中古から中世初期の伝播かと思われる。ただし、ニテがデとなるのはもう少し時代が下る点、近畿中央のデが伝播したと見るより、ニテ＞デが各地でおこったと考える方がよいか。

ケン類　近畿中央の歴史は先に述べたので省略して、問題はやはり中国・四国以西のケン類の由来である。

前稿では、ケン類をカラ・カラニとするのは、GAJ でケン類とカラが隣接する点で不審とし、むしろサカイ類とケニ（故ニ）類の変化の可能性を考えた。そして、状況的にはサカイ類が強く支持されるものの、サカイニ＞ケニの変化の説明が難しいこと（東日本はハケ・サケなどサカイの語頭を保存する傾向が強い）、「田植歌」のケニを中世期のものと見て、一方で国語史でのサカイ類

は近世に入ってから隆盛すると見たため、成立時期がそぐわないことなどの難点を述べた。

これに対して、ケニも文献での勢力のほどは分からず、また〈形式体言ケ（故）＋ニ〉が果たしてどう今日の広く強い勢力を獲得できたかの説明も難しい点があり、一つの候補にとどまるとした。[18]

本稿でも結論は出ないが、ロドリゲス『日本大文典』のサカイ類をみると、小林千草氏による文献調査データでの出方とやや違い、実状は中世末期にも接続法のサカイ類がある程度は存在したことが推測できること、サカイ類は今日近畿から東部日本の日本海側に広く分布して、その新しい勢力のほどが知られることからすれば、状況的には中国・四国以西に伝播しなかったことは考えにくいこと、一方のケニがすみやかに広域に展開する理由の説明が付けがたいことから、やはりサカイニ＞……（サカイニ＞ハケニ＞ハ消滅等の経緯）……＞ケニの過程を経てケン類となったと想定することが妥当であろうか。

これに対する間接的論拠としては、次のような点も参考になるか。

鹿児島には古くサケンの存在が知られていて、[19] これもサカイ（ニ）からの可能性が大きい。また、ケンは『日本方言大辞典』によれば、福井・富山・奈良県吉野などにも散見されて、サカイ類と重複する地域にある（恐らくケレドモに由来する、逆接のケンとは区別する必要がある）。

こうして仮にケン類をサカイニ出自とすれば、近畿の新しい形式であるサカイ類が東西にきれいな周圏的分布を描くことになり、分布様態が自然な形に収まる。

さて、GAJ でケン類を詳しく見ると、中国山間部に広くケー、島根県・九州西部一帯・四国の西部と東端部などにケンといった分布である。これら相互の関係はどうであろうか。

まず、末尾形に注目すれば、ケン|に囲まれてケー|があり、中央のケーはケンの地域から新たに生じたと考えられる。ケニは四国東部一帯にやや広くあり、岡山県瀬戸内にも孤例が見える。これらはかつてひと続きであったことが考えられて、これに囲まれるようなケンはここから生じたものであろう。つまり、ケニ＞ケン＞ケーの変化が想定される。これは変化の自然さの点でも支持されよう（逆のケー＞ケン＞ケニは起こりにくい）。

次に語頭形式に注目すれば、キ～形が四国東部と九州東部にあり、他は広くケ～である。この四国と九州のキ～がかつて連続していたと考えることは無理と思われ、ケ～＞キ～の変化がそれぞれの地域で何らかの理由で個別に起こったと見る。ケニ＞ケン＞ケーの流れに、語頭の個別変化がこの地方で個別に起こったと推測するのである。

ホドニ・カラ　「田植歌」ではニ・ホドニ・カラも見られた。ニはホドニに先行するはずである。ニは確実に見られる地域だけでもかつて近畿の両翼の広い地域に分布していたことが想像されてくる。中国地方では、今日のケン類が隆盛する以前に、これらの形式があり、それがケン類（サカイ類か）に淘汰されたと見る。

同じ事は、近畿に近い四国にも想定され、九州北部でもそうであったかも知れない。

ニなど時期の早い形式のさらに以前は、〈已然形＋バ〉が日本の東西にあったろう。

九州南東部にあるカラも問題となる。これは、ケン類をサカイ類起源と見れば、ケン類より明らかに先立つものに違いない。

さて、近世文献では各地に格助詞カラのうち理由を表すに近い用法が見られた。京都方言を主とする国語史では、カラの理由の用法は文脈状況としてはあるものの、理由の接続助詞として発展することは、少なくとも近世後半期までは稀であった模様である。[20] これは中世初・中期に隆盛した他の諸形式に伸張をさまたげられたのであろう。

それに対して、九州東部のカラは、格助詞から文脈的に派生した理由表現が次第に形を整え強化されたものと考えてはどうか。カラの理由表現化はどの地域にも伏在し、またいくらかは発現したが、ケン類（サカイ類）の及びにくかった九州東南部でこれがよく発達する状況があったと考えてみる。山口県や中国・四国に散在するカラも内的可能性としての理由表現が現われたものと見られようか（ただ、近畿に近い地域ではいくらか共通語の回答も混じるか）。

デ　鹿児島地方のデはどう考えられようか。デは近畿外辺地域にあるが、九州南部とはいかにも離れていて、同根とは考えにくい。

デがニテから生じたことは動かない。先に、この成立過程は各地域に同時に起こりうることに触れた。鹿児島近辺でも、あるいはかつてニが先行して存在し、これに確認の気持ちを強めるテを付加し、やがてデが生じたことが考えられる。近畿のものと同じ時期・同じ根のものではないが、成立の過程は同じと考える。古く見えたサカイ類と見られるサケンは何らかの理由でこのデに駆逐されたのであろう。

では、なぜ鹿児島も九州東部のようにカラではなかったのか。この解答は難しいが、考えつくのは、格助詞のカラの〈起点〉以外の多様な用法がほぼ九州東部の理由のカラと相補分布をなす点である。[21] つまり鹿児島にも格助詞カラの多様な用法が存在する。鹿児島も理由のカラとなれば、こうした格助詞のカラと混乱を起こす恐れがなかったであろうか。それを避ける方策として、理由のカラでなく、既に存在したニ＋テ＞デによったと一応考えておきたい。鹿児島・宮崎地方にはサカイ類はあまり強く及ばず、このような独自形の成立がさまたげられなかったのではないか。

今回は地方的な方言文献調査を中心としたため、膨大な方言調査データや各地方言の研究書を考察に織り込めなかった。次の機会としたい。

注

（1）拙稿「原因・理由を表す助詞の分布と歴史（ノート）――『方

言文法全国地図』の解釈―」（『日本語の歴史・地理構造』明治書院、一九九八年所収。）

（2）東北地方の模様とその歴史は、小林好日『方言語彙学的研究』（岩波書店、一九五〇年）参照。また大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語』（筑摩書房、昭和五〇年一月）所収の北条忠雄氏執筆のもの、『講座方言学』の東北地方の巻などに考察・解説がある。

（3）カラ・カラニ出自説には北条忠雄「東北方言における理由表現の歴史」（日本方言研究会、第一七回発表原稿、一九七三年一〇月）・佐藤亮一「標準語・共通語の地理的背景」（「日本語学」一九九二年五月臨時増刊号）などがあり、慎重にサカイ類の可能性を示唆するものに小林賢次「原因・理由を表す接続助詞」（「日本語学」一九九二年五月臨時増刊号）のち『日本語条件表現史の研究』（ひつじ書房、一九九六年二月）所収、ケニ（故二）を示唆するものに平山輝男編『広島県の方言』（明治書院、神島武彦氏執筆と思われる）があり、また注（1）拙稿も候補の一つとした。小林氏の論には柳田国男などの説も紹介するところがある。

（4）山口堯二『日本語接続法史研究』（和泉書院、一九九六年三月）、小林千草「中世口語における原因・理由を表わす条件句」（国語学91、一九七三年九月）、同「近世上方語におけるサカイとその周辺」（『近代語研究』5所収、武蔵野書院、昭和五二年三月）、小林賢次『日本語条件表現史の研究』（ひつじ書房）第一五章。また、金田弘『洞門抄物と国語研究』（桜楓社、昭和五一年一一月）第九章も参考になる。

（5）注（4）の小林千草氏のもの。

（6）鈴木勝忠編『未刊雑俳資料』（第一期～第四六期、一九六一～一九六八年、油印私家版）。資料年次も鈴木氏の解説によった。用例の出所は29・11・40とあれば、29期11の40丁の意味である。拙稿「近代伊勢方言史小考」（文学語学103、一九八三年一〇月）でもこれを資料の一部とし理由表現にもふれた。

（7）『日本庶民文化資料集成』第四巻（三一書房）所収の本文による。ただ、「能郷猿楽狂言詞章」の書留の時期は相当下ることに問題もある。

（8）友久武文編『稿本田植草紙』（渓水社、平成二年三月）。

（9）山内洋一郎『中世語論考』（清文堂、一九八九年）参照。

（10）注（1）拙稿では、このケニを中世期の反映と希望的にみて、国語史での使用がこれより遅れるらしいサカイ類がケニの元となったとする考えに疑義をもったが、田植歌の伝承性と書写時期を考えると、ケニを中世期とするにはもう少し例が必要と考えるようになった。

（11）泉井久之助「寛政刊本だいがく」（「方言」春陽堂、第三巻第九号所収）の翻刻による。小林氏のものは注（4）の「近世上方語におけるサカイとその周辺」。

（12）『坂本龍馬関係文書一』（日本史籍協会叢書115、東大出版会）の本文による。

（13）佐賀滑稽本『滑稽洒落一寸見た夢物語』（慶応三年序文）は、吉町義雄『九州のコトハ』（双文社出版、昭和五一年一二月）所収のものによる。この資料は篠崎久躬『長崎方言の歴史的研究』（長崎文献社、一九九七年五月）にも研究がある。佐賀人によるいわゆる郷土本で、方言調で書かれた滑稽本である。

（14）村山七郎編著『漂流民の言語』（吉川弘文館、一九六五年）所収「日本語会話入門」、及び同他編著『日本版　新スラヴ日本語辞典』（ナウカ、一九八五年）による。引例はロシア語単語および村山氏による母音の無声化記号などを省略してある。

（15）村山氏の注では、「ちっとけん京」のケンを本稿のケン類と解する記述がある。

（16）注（13）吉町氏の著書に所収の翻刻本文による。解説もこれを参照した。

（17）サカイ類は関東にも伝播した可能性が指摘されている。亀井孝「理由を表はす接続助詞『さかいに』」（「方言」第六巻第九号所収）参照。また、注（4）金田弘著では、東国での曹洞宗の活動との関連に言及し、近畿に劣らないサカイ類の拡散伝播の模様を述べている。

（18）亀井孝氏は注（17）に示した論文で、「広く西日本に亙つては『けれ』の系統を引くと思はれる諸形が勢力を有し」とするが、これが何かは述べていない。注（4）平山輝男編『広島県の方言』でもケニ（故ニ）説を取るが、その根拠は示されていない。

（19）上村孝二『九州方言・南島方言の研究』（秋山書店、一九九八年三月）第3章の「サケン稿」にサケンを「さかい」の薩摩訛りとする。ただし、逆接もあり。

（20）注（4）の山口堯二著、第一一章参照。この章ではまたカラに逆接的用法もあることが示されている。本稿の地方文献では逆接に解される例はまずない。

（21）『九州方言の基礎的研究』（改訂版、風間書房、平成三年一一月）所収の文法地図49「経由・手段」と51「順接から」との図による。類例の全国的な模様は、GAJ データを使用した福嶋秩子「新潟方言の格助詞『カラ』の用法をめぐって」（「日本語学」（一九九二年五月臨時増刊号）所収）にある。これらによれば九州では手段のカラと理由のカラとの相補分布は南部に顕著である。ただし、宮崎県南端では両方のカラがややある模様。

付記　用例の引用は論証に妨げのない箇所の表記を改めたところがある。頁は、依拠したテキストのそれである。また、図1は「日本語学」（一九九二年五月臨時増刊号）所収の佐藤亮一氏の論文中のものを承諾を得て利用した。記して感謝する。本稿は文部省科学研究費による成果の一部である。

（ひこさか・よしのぶ　本学教授）